



猫花文庫

nos. 125, 143, 169, 230, 255

猫神社

佳 (Kei) 作



猫花書店



猫神社 もくじ

初詣	2
性分	15
恨みます	30
短気には、にゃんこ顔	47
初詣（再）	64

# 初 詣

「ぶは〜〜」

人混みを掻き分け、ようやく僕は、ごった返す参道から逃れることが出来た。

合格祈願にと、このあたりで一番有名な神社に来てはみたものの、寒い中二時間も並んだというのに、お賽銭さいせんを放り投げて柏手を打とうとしたら、どやどやと脇に押し出されて、はい、終了。おみくじもお守りも買えなかった。こんなんじや先が思い遣られる。

カップルや家族連れで初詣に来てる人達は、楽しそうだ。酔っぱらって真っ赤になってる大人もいる。お正月ってのは、こんなふうになるく迎えるものなんだろうと思う。

それにひきかえ僕ときたら…。お盆もクリスマス

マスも大晦日もお正月もなしで、勉強ばかりの毎日だ。

「おー、おめでとう」

「今年もよろしくな。わはははは」

あんな明るい声を聞いているだけで、どんどん気が滅入っていく。

賑やかな表通りをあとにして、僕は足早に、家へと急いだ。

\* \* \* \* \*

とぼとぼと帰り道を歩いていると、雪が降り出した。

時折、ひゆう、と雪まじりの冷たい風が吹き付ける。手と足がかじかんで来た。



何処かあつたまれる場所はないだろうか。きよろきよろと辺りを見回してみる。

すると、住宅街の路地の突き当たりに、ぼんやりと提灯の明かりがふたつ、ゆらゆらと揺れているのが見えた。

その赤い光に、僕は何故か、ふらふらと吸い寄せられるように歩いていった。

提灯の明かりが点されていたのは、小さな会社だった。

赤い鳥居が建っているのでお稲荷さんかと思つたら、お社の両脇に鎮座あうんましましていたのは、なんと猫だ。ちゃんと阿吽あうんの顔をしているけれど、怖いんだか可笑しいんだか判らない、微妙な表情をしている。

まあこれも何かの縁だろう。僕は財布から五

円玉を取り出し、賽銭箱に放り投げた。

そうして、ぱん、ぱんと拍手を打つ。

心の中で、念じる。

「志望校に、合格しま…」

「足りひんわ」

え？

「これっぽっちじゃ、かつおパックも買えへんがな」

「な」

足下で何かが、かん高いダミ声で呟いた。

驚いてそこを見ると、茶トラ模様の大きな猫が、どつしりと僕の靴の上に座って、こちらを見ていた。そして、

「もちつと奮発ふんぱつしてえな」

「うわっ！！」

喋ひくった。

僕は吃驚びっくりして飛び退いた。猫は悠然と座り直す、僕を呆れたような目で見た。

「何や、猫神さんにお参りに来たんやろ。そんな驚かんでもええやんか」

「ね、猫が、しゃしゃしゃ喋ひくってる」

「当たり前や。わしは、ここの稲荷神いなりがみさんの眷属けんぞくや。ケンゾク。な。判るか？」

僕はふるふると首を横に振った。

「まあええわ。あんな、どんなお願いするか知らんけどな。今時、そんなちっさい金額では、神さんだって願い聞いてくれへんで。世の中不景気やさかいな」

なんでこの猫関西弁なんだ。しかもなんかガメツイぞ。

「ほれ、先行投資やと思うて、わしに猫缶でもおごってんか。あしたの快便くらいは保証したるさかい。ほれ」

そう言って猫は右手を差し出す。

僕は腹が立って、差し出された猫の手を、ペシッと叩いた。

「ひやつ、痛いイタイがなもう。何すんねん」

「何すんねんじやないよ。なんで僕が猫缶おごんなきやいけないんだ」

「せやから、わしは神さんの」

「眷属だろうがケイゾクだろうが、僕にや関係ないんだよ。僕は神様にお参りしに来たんだから」

猫は頭を振って、大げさに嘆くようなふりをした。

「かあつ！ 甘い！ 甘いわあもう最近の若いもんは。ええか、本丸を落とすにや外堀から埋めんとあかんねんで。眷属ちゆうたら神さんの使いや。な、わしら眷属の覚えがめでたいと、そらあ話も早うなるわけや。社会に出たら常識やでこんなもん」

そんなこと言われても、僕は猫に餌をおごる気はない。

「あつそ、じゃあ帰るよ。もうさつきお参りはしてきたんだから」

僕がふいっと背を向けると、猫は先回りして僕を押し止めようとする。

「わかったわかったわかったがなもう。怒らんというや。今年初めてのお客さんやさかい、逃げられるとわしらも困んねや」

「お客さん？」

猫は急に小声になって、僕の耳元で囁いた。

「ここだけの話、わしらにもノルマチゆうのが

あんねん。ノルマ達成できひんと、来年以降の昇進に響くしな。そら必死やでもう」

「ふうん」

「わしここ三年続けて成績不振やねん。な、百円くらいでええから、入れてくれたら、色々サービスするさかい」

どうやら猫の世界も大変らしい。何だかこの猫が憐れに思えてきた。

「判ったよ。ちよつと待って」

僕は財布から百円を出して、賽銭箱に放り投げた。

それを見た猫は、溜息をついて言った。

「なんや、あのな、百円くらい、ゆうたら、せ

めてもちつと色付けてくれんと」

僕は思いきりムカついた。

「何だよ！ 可哀想だと思ったから入れてやったのに。もういいよ帰る」

「ああもうすぐ怒るんやな。冗談や冗談やって」

と、猫は僕を押し止める。

「もうお金はないからね」

「判ってるがな。トータル百五円入れてもろたんやから、それなりに願いを叶えてあげんとな」  
「えっ、そうなの？」

「当たり前やがな。猫神サン、ウソツカナナイ」

これはひよつとしてギャグのつもりだろうか。

僕は無視して続けた。

「でもさ、それなりになってのが気になるな」

「そらそうや。物事には相場ちゅうもんがあるねん。しかし願いの内容によって相場も変わるさかい、そこらへんの加減はわしに任せてもらわんと」

「そうなんだ…」

「どうも信用できない、というか、信じられない。」

「でも、どうせ神頼みなんてものは、そんなものかもしれない。ここはひとつ、お願いしてみるか。」

「あのさ、僕、第一志望の大学に、合格したいんだけど…」

「は、合格？」

猫は眉を顰めた。

「合格ちゅうことは、どういうこと？ もうちよつと具体的にゆうてくれんかな」

「具体的に？」

「せや。合格するためには、何が必要なんや？」

「具体的に…って、言われてもなあ…。」

「ええと…つまり、そう、入試で点数が取れるように、ってことかな」

「入試で点数ねえ…。まだ漠然としてるわ。具体的にやな、点数取りたいのは、どこやねん」

「どこって…」

そんなに絞り込むのか。まあ百五円だから、仕方ないのかな。

「うーんと、数学1Aの…平面幾何の証明問題…かな」

「うむ、よろしい」

猫は少し偉そうに、腕組みをした。そして、何処から出してきたのか、棒に白いひらひらした紙をつけたのを持って、振り回しながら踊り始めた。

「ふくにやふにや、ふくにやふにや、ゴウカクキガンでヘイメンキカク、ニユウシでショウメイ、ふくにやふにや」

僕には巫山戯ふざけているようにしか見えない。

やがて猫はぴたりと立ち止まり、僕のほうに、棒の先のひらひらを向けて、厳かに言った。

「よいか、今から言うことばを、忘れるでないぞ」

「は、はい」

ごくり。

僕は唾を飲み込んだ。

猫は、息を大きく吸い込むと、大きな声で、叫んだ。

「困ったときには、にやんにやんにやん！はい、リピート、アフター、ミー」

「こ、こまったときには、にやんにやんにや…え？」

「願いは叶かなえた！ほな、さいなら〜〜〜」

ぶん、と猫が棒を振り回すと、白い紙切れが  
ひらひらと舞った。

それは雪のかけらとなって、僕の周りに降り  
注いだ。

その様子に目を奪われ、はたと気付くと、猫  
はもうそこにはいなかった。

「な、何なんだ一体」

僕は思わず、その場にへたり込んだ。

\* \* \* \* \*

「ぐーっ、わからん」

僕はセンター試験の会場で、唸っていた。

やっぱり出た。苦手な図形の問題が。

ちゃんと準備した積もりなのに、いろいろ覚え

えた積もりなのに、苦手なものは苦手なままだ。

他の問題はだいたい出来た。あとはこれだけだ。なのに。

「あと三分」

時間がない。額に脂汗が滲んでくる。

どうしよう。困った。

こまった。

こまったときには。

「にやんにやんにやん」

「なぬ？」

試験官が振り向いた。

周りの受験生も僕をじろりと見た。

やばい。思わず口に出してしまった。

「あつ、いえ、なんでもないです」

試験官は怪訝そうな目を僕に向け、また前を向いて歩き出した。

もうしようがない。これを書くしかない。

僕は、残った三問のマークシートを、

「2・2・2」

と、塗り潰した。



きーんこーんかーんこーん

「はい、時間です！ 鉛筆を置いてー」

試験官の声が会場に響く。僕はぐったりして、机に突っ伏した。

\* \* \* \* \*

「五・九・六・二……あ、あ、あった！」

僕の番号が、あった。

掲示板の合格者番号の中に。

僕は思わず両手を突き上げた。

「お、受かったか！ やったな！」

ラグビー部らしい人達が僕を取り囲んで、胴上げを始めた。

僕は空中に放り投げられながら、幸せだった。本当に紙一重だったのだ。

センター試験の自己採点は、志望大学の合格ラインぎりぎりだった。二次試験も、はっきり言って自信が無かった。でも、受かった。合格したのだ。

思えば、あの数学の問題、「 $2 \cdot 2 \cdot 2$ 」と適当にマークしたあの回答、三つのうち一つしか正解していなかったのだ。しかし、あのひとつの正解が、もしかしたら合否を分けた点だったのかもしれない。

今までの苦労が報われた気がして、僕は飛び跳ねるように家路に就いた。

住宅街にさしかかり、僕はふと路地の奥を見た。

その突き当たりに、ぼんやりと提灯の明かりがふたつ、揺れている。

そうだ、確かここだった。僕は吸い寄せられるように、ふらふらと明かりの方へ歩いた。

赤い鳥居に、阿吽の猫。やっぱりここだ。

僕は財布から百円玉を取り出し、賽銭箱に投げ入れた。

そして、ぱん、ぱんと柏手を打ち、心の中で呟いた。

「おかげさまで、合格できました。ありがとうございます……」

「御礼やったら、もちっと奮発してえな」

「うわっ！」

吃驚して飛び退いた。賽銭箱の陰からは、あの猫がのそのそと出て来た。

「な、なんだ、いたんだ」

「いたら悪いんかいな」

「いや、そんなこと……」

「ほれ、願いが叶ったんやろ、奮発や奮発」

そう催促されると、どうも素直に出したくなる。

「あのねえ、叶ったっても、一問だけなんだけど」

「三つのうち一つやんか。三割打者や。往年の掛布みたいなもんやで。それで見事合格やろ、

めでたい一発、ランデイー・バース級のホームランや！」

誰のことを言ってるのかさっぱり判らない。でもまあ、合格したのは事実だしな。ご祝儀のつもりで、少し奮発するか。

「じゃあ、これ」

僕は五百円玉を猫にちらりと見せ、ぽんと賽銭箱に放り投げた。

「なんやろ。硬貨もええけどな。も一つマルが付けば一葉さんやんか。あ、諭吉さんでもええんやけどな」

僕は呆れた。

「何だよそれ。もういいよ、帰る！」

ふいつと怒った振りをしたものの。

「毎度おおきに。また来てやろ」

と叫ぶ猫の声に、僕は思わず笑ってしまった。

「あははははははは」

僕はたぶん、

また猫神さまに、お世話になるに違いない。

おしまい

# 性 分

「はあ…」

溜息ためいきをついたら、その息がもわりと白く煙った。

突然寒さが身にしみて、僕はぶるっと身震いをした。

いつもの会社からの帰り道。住宅街の中をとぼとぼと歩く。辺りの家々のほとんどは、電気が消えて寝静まっているようだ。無理もない。もう日付が変わってしまっただから。

毎日僕だけこんなに遅くなってしまうのは、きつと僕の要領が悪いからなんだろう。もつとテキパキ仕事が出来ればいいいつも思うんだけど、こればかりはしょうがない。

「はあ…」

また溜息をついてしまう。そして、ついつい下ばかり見てしまう。

最近何をやってもうまくいかない。いや、ずっと昔からうまくいったことなんてほとんどないのだ。楽しいこともないし、嬉しいこともない。どうして僕はこうなんだろうか。どうしたら、もつと明るい人生を送れるのだろうか。

「はあ…」

三度目の溜息をついて、ふと顔を上げた。

「…あれ？」

下ばかり見て歩いていたので、何処かで角を

曲がり間違えたらしい。見覚えのない風景だ。

住宅街の無機質な路地。点滅した街灯が、辺りをもやもやと照らしている。

そのむこうに、ぼつりと赤っぽい明かりが点いているのが見える。

「何だろう」

僕は吸い寄せられるように、その明かりのほうへ歩いていった。

\* \* \* \* \*

見えていた明かりは神社の提灯ていとうだった。

こんなところに神社があるなんて、知らなかった。お稲荷いなりさんのような赤い鳥居が立っている。そして狛犬こまいぬのような像がふたつ。いやお稲荷

さんならキツネじゃないのか。よく見てみると、キツネでもイヌでもない。

猫だ。

猫の像が二匹、神社の前に立っている。こんな神社初めて見た。

奇妙なものだ。まあ、どうせ神社に来てしまったんだし、お参りでもしておこう。

財布からもぞもぞと小銭を取り出す。いくらかも確認せずに、ちやりんと賽銭箱さいせんばこに投げ込む。そしてそうつと、柏手を打つ。

「もっと、ましな人生を、送れますように……」

小さく、口に出して言うてみた。

「はあ、しみったれとるなあ」

「そうだよ僕はどうせしみったれで」

「十円くらいじゃ、どうもならんでそんなもん」

「そうだよどうせ十円くらいじゃ」

え？

誰だ？

「ほれ」

足下でやさぐれた声がする。

声のするほうを見ると。

茶トラ模様のでっかい猫が、僕の靴の上に座って、手をずいと突き出している。

「ほれ、もちっと奮発せんと」

そして喋った。

「うわああああああ」

僕は腰を抜かして尻から転んだ。

猫はのっそり立ち上がった。しかも二本足で。

「そない驚かんでもええやんか。お参りに来たんやろ」

やっぱり、猫が、喋ってる。

嘘だろ。

「何や、鳩が豆鉄砲くろうたような顔して。何をお願いしに来たんや君は」

猫はそう言うと、僕の方にゆっくり歩いて来る。

怖いんだか可笑しいんだか判らないけど、僕  
はとにかく驚いて声が出ない。

「ほれ、しやきつとしいや」

猫は白いひらひらした紙の付いた棒を、僕の  
鼻の穴に突っ込んだ。

「ふがっ」

「ほれほれ、何か言うてみい」

言ってみろって言ったって、これじゃ何もしや  
べれない。

猫は棒をしまうと、僕をじろりと見て言った。

「あんなあ君なあ、言いたいことはちやんと  
言  
うたほうがええで。奥ゆかしいのん今日日ウケ  
きょうび

へんさかいな。まあええわ、今日は特別、出血  
大サービスや！ わしが占いしたるさかい」

と、何処から取り出したのか、猫は魚の骨を  
僕の目の前に置いた。そうして細い棒に火を点  
け、その骨をあぶり始めた。

ちりちりと骨の焼ける音がして、ふんわり焼  
き魚のようないい匂いがする。

「ふむ…」

骨全体が焦げたところで、猫はそれを持ち上  
げ、難しそうな顔をして見ている。僕はただ呆  
然と見守るしかない。

すると猫は、僕の方を向いて、片方の眉（の  
ような毛）を持ち上げながら言った。



「あかんわ…」

「あ、あ、あかんて何ですか」

僕は思わず声を上げた。猫は骨を背後に隠し、腕組みをして重々しく言った。

「君なあ、自分が要領悪い、何事もうまくいかんて思てるやろ。けどな、原因は君の要領の悪さと違うで。もっと他に原因があんねや」

「えっ」

「最大の原因はな、君のその性分や」

「性分」

「せや。君な、何でもよかれと思って人の手伝いしてまうやろ。無理やと判っていても言われればそのとおりにしてまうやろ。それがあかんねん」

じろりと猫に見られて、僕は身が竦む思いだった。

その通りだ。

確かに僕は、頼まれると嫌とは言えないし、上司から言われればどんな仕事でも頑張った。やらなきゃいけないと思ってるからだ。

それは。

「それは…僕が人より出来ないから…もっと頑張らなきゃと思つて…」

「かあっ！ ああもう、お目出度い奴やなあほんまに」

猫は目も当てられないといった表情で首を振った。

「そんな調子やったら、いつまでたっても貧乏

くじ引かなあかんで。でけることとでけへんこととは、きっぱり分けていかんと」

「そんなこと言われても…」

「まあ、その性分をなんとかしてくれっちゅうことなら…」

もつともらしく猫は腕組みをし直して、横目でちらりと僕を見た。

「してやらんでもないがなあ」

「えっ」

それでどうにかなるのだろうか。

僕の、不幸な人生は。

「どっ、どうにかなるんですか」

「さてなあ…。幸か不幸かは判れへんけどなあ

…」

「え？」

「性分を変えることはできるっちゅうこっちゃ。けど、それが君にとって幸せかどうかは判れへん」

しかし、それでも。

今のままでいるよりは、いいんじゃないだろうか。

「おっ、お願いしますっ」

「さよか、ええのんかそれで」

「はい…たぶん」

「たぶんで何やねん」

「ははははい！ きつと」

「うし…ほな」

猫は手を僕に差し出して、

「五百円」

と言った。

「はあ…」

僕はおずおずと、財布から五百円玉を取り出して、猫の手に乗せた。

「思い残すことはないのか」

「は？」

「いや…何でもあらへん」

何なんだそれ。気になるじゃないか。

僕が口を開きかけたとき、猫は大きな声で叫

んだ。

「ネツコーノー、シヨオープン、アゲタロカー」

僕はびっくりして尻餅しつもちをついた。猫はそれを見て、

「ほれ、正座や正座」

と言った。僕は言われるがままに、その場に座り直した。

猫は一本の棒を持っている。その先には、おもちゃの猫の手みたいなのが付いている。肉球はピンク色だ。

それを高く掲げたかと思うと、猫は踊りながら歌い出した。

「イイカゲ〜ン、イイカゲ〜ン、キミニタリヒ  
ン、イイカゲ〜ン」

僕は呆気に取られて猫を見て居る。

「オシリフリフリ、イイカゲ〜ン」

いったい何をしてるんだろう。

「ネコハヤツパリ、イイカゲ〜ン」

延々と猫の変な歌と踊りが続く。

僕は何だか馬鹿らしくなってきた。

「はあ…」

重い溜息をついた、その時、

「ネツコーノー、シヨオープン、アゲタルワー、  
それっ」

猫が天高く飛び上がった。

そして、棒を大きく振りかぶった。

棒の先に付いている猫の手は。

ずんずん、ずんずん大きくなって。

空いっぱい広がった。

「そりやっ」

猫は棒を、僕めがけて振り下ろした。

巨大な猫の手が。

肉球が。

僕に。

「ひゃ、ひゃああああああああああああああああああ」

\* \* \* \* \*

「おいマキシマ、ちよっと来い」

課長が僕を呼んだ。やれやれ、また説教かな。僕はのっそり立ち上がって、課長の机の前に立った。

「何でしょうか」

「何でしょうかじゃないよ。昨日頼んだ資料はどうなってるんだ」

「いっけない。すっかり忘れてた。」

「あれ？ 忘れてた？」

「嘘だろ。仕事のことを忘れるなんて。僕はどうかしている。」

「すつ、すみませ」

「ああ、あれね、まだですよまだ」

僕の口から、とんでもない言葉が飛び出した。

「なに？」

「先に仕上げなきゃいけない仕事があるんで、ちよっと待ってくださいよ」

課長はぼかんとして僕を見ている。

まわりの同僚たちも。信じられないといった顔で。

「ぼ、僕はいったい何を言ってるんだ。」

「マキシマ君、ど、どういうことかなあ、ちゃんと説明してくれないとお」

課長が顔を強張らせて言った。うわあ怒ってる怒ってる。

その様子を見て、僕はなぜか、可笑しくなつてしまったのだ。

「いえね、〇×商事へのプレゼン資料のほうが先かなあと思つて。今日の昼に使うでしょあれ」

「なんだそれもまだなのか」

「やだなあ、それを昨日の夜、急に頼んできたの課長じゃないですかあ」

「うぐつ」

課長は返答に窮している。

なんだか気持ちいい。

「そうゆうことで、もしお急ぎなら、他の人にやってもらってくださいよ。じゃ」

そう言つて、僕は席に戻つた。

ふと我に返る。僕はなんてことをしてるんだ。今までだったら、はいごめんなさいすぐやります、なんて言つて謝つて、お昼休みもなしに働いて、結局うまくできなくて…。

そうか。

そういうことなんだ。

僕はやけに嬉しくなつた。おかげで仕事はずいぶんはかどつた。

\* \* \* \* \*

「おいマキシマよ」

「あ、先輩、何ですか」

定時を過ぎた頃、同じ課の先輩が声を掛けて

来た。

いつも僕に面倒な仕事を押し付けてくる、嫌な人だ。

「あれどうなった、あれ」

「あれって何すか」

「とぼけんなよ。昨日の夕方言っといたあれだよ」

「ああ、あれね」

「もう出来てんだろうな」

「まさかあ。今日はそれどころじゃなかったっすから」

「何だとお？」

先輩は眉をつり上げて怒っている。

「お前、今日はやけにいい気になってやがるな。」

さっさとやれよあの仕事。明日使うんだからよ」

「嫌ですよお。あれは僕の仕事じゃないですもん」

「なにい」

「それに、僕は今日はもう帰るんです。自分のなら自分でやってくださいねえ先輩」

「こっこの野郎」

怒りを吹き上げる先輩を無視して、僕は時計を見た。

「ああ、もうこんな時間だ」

「ちよつとこら」

「どうも、おっさきで〜す」

僕はスキップしながら事務所をあとにした。外はまだ明るい。



こんな時間に帰れるなんて。

楽しい。

なんて楽しいんだ。

\* \* \* \* \*

夕闇が住宅街を包んでいく。僕はその中を、鼻歌を歌いながら歩いていく。

今日は帰ったら何をしよう。今まで出来なかったことが色々出来る。

うきうきして足取りも軽やかだ。

「たーのしーい」

思わず口に出してしまった。

「御機嫌やな君」

「へ？」

声に反応して振り返ると、あの神社にいた猫が、不機嫌そうに立っていた。

「ああ、あの時の」

「あの時のじゃあれへんがな。願いが叶ったやないかい。そうゆうときはな、神さんに報告に行くもんやで」

「ああ、そうですねえ、えへへ」

「えへへて何やねん」

「まあいいじゃないですか。テキトーにやっといってくださいよ、テキトーに、ね」

「はああ？」

猫は目をまんまるにして僕を見ている。それ

もまた楽しい。

おしまい

「僕はもう帰るんです。またそのうち行きますよ、そのうちね」

「ちよ、ちよっと待ちいや」

「じゃあね〜」

呆然とする猫に手を振って、僕はスキップしながら家へと急いだ。

楽しくて楽しくて、身体ごと弾んでいるようだ。

僕の人生は、こんなに明るかったんだ。

そんな僕の後ろのほうで、ぼそっと呟く猫の声が聞こえた。

「あかん、効き過ぎたわ…」

恨みます

犬を連れた老夫婦が、凍り付いた。

\* \* \* \* \*

あのくすんだ電柱が、憎い。

あの床屋のぐるぐる回る看板が、恨めしい。

あのコンビニの明かりが、胸糞むなくそ悪い。

私の視界に入ってくるもの全てが、私の憎悪の対象だ。

この世界め。

私をこんなに苦しめ、悩ませる世界が、憎いのだ。

それというのも。

「恨んでやる」

私は声に出して言った。

「…なんて言ったの今」

「だから、別れてくれよ」

「なんで？」

「飽きたんだよ」

「何に」

「お前にさ」

「なんで飽きるのよ」

「知らねえよ」

「だいたい飽きるって何よ」

「あん？」

「私はラーメンか牛丼みたいなもんってわけ」

「…っせえな」

「誰よいったい」

「何が」

「他に女ができたんでしょ」

「できたんじゃねえよ」

「じゃあ何よ」

「お前にや関係ねえよ」

「別れないわよ」

「あ」

「あんたに幾らつき込んだと思ってるのよ」

「は？」

「仕事がうまくいかないだの、急に入り用だのつて、あんたに幾ら金を用立てしたと思ってるのよ」

「よ」

「知るかよ。手前が勝手にやったんだろ」

「なんて言い草」

「だからよ、もう俺につきまとうなよ」

「じゃあ金返しなさいよ」

「なに？」

「あんたに貢いだ金、全部返しなさいよ」

「何だよ金、金つてよ。そういう奴なんだよお前はよ」

前はよ」

「じつ、自分のことを棚にあげて、な、な」

「とにかく、俺にかまうな。じゃあな」

「ちよつ、ちよつと待ちなさいよ！」

ばたむ。

ぶろろろろおおおお

「ちくしょー！」

\* \* \* \* \*

「恨んでやる」

また声に出した。

薄暗い住宅地。人気のない、一度も歩いたことのない路地を、私は曲がった。

家々からは、夕餉ゆうげの匂いが漂って来る。西日が随分傾いて、辺りを真っ赤に染める。

憎い。憎い憎い憎い憎い。

あの家もこの家も。

紅く染まった路地も。

あの鳥居も。

…鳥居だ。

真っ赤な鳥居が、夕陽のせいで辺りに溶け込んでいた。

その向こうには小さなお宮が。

へちやむくれの、犬だか猫だか判らないような動物の置物が、無愛想な顔で、お宮の前に並

んでいる。深く影を落としたその顔は、私には凶悪なものに見えた。

そういえば。

お稲荷いなりさんの呪いってのは、凶悪だと聞いたことがある。

見たところ、ここはお稲荷さんみたいだ。キツネはいないけど。

私は鳥居をくぐり、お宮の前にかがみ込んだ。そうして、眼を瞑って、一心不乱に呪った。

「あの男、あの男を…不幸のどん底に…」

呪いの言葉を、早口に、ぶつぶつと唱えた。

「踏みつけられ、八つ裂きにされるよりもっと凶悪な不幸を、あの男に…」

「早口やなあ姉ちゃん」

「っさいわね」

「もちっとゆっくり喋しゃべらんとわかれへんがな」

「おだまりっ」

「ほれ深呼吸してー」

「うるさいってゆってんでしょっ！」

キレてがばっと振り向いてみた。

しかしそこには誰もいない。

はたと我に返った。もしかして、あまりの怒りに頭がおかしくなったか。

「ほれ」

声がした。

どこだ。

「何よりもまずお賽さいせん銭や」

にゆつと、私の目の前に突き出されたのは。

ピンクの肉球。

「奮かんぱつ発したってや」

「ひゃっ！」

私は飛び上がって、お宮に思い切り背中をぶつけた。

猫だ。

茶トラ模様の、大きな猫だ。

ひらひらした白い紙のついた棒を持って、私に右手を突き出している。

「う、うそでしょ」

「何やそない驚かんでも。今やグーグルマップで世界中を旅する時代やで。そら猫かて喋るがな」

いやそういう話じゃないだろ。

心の中でツッコんでみたものの、目の前の状況を、私は信じられずにいた。

「姉ちゃん、ぎょうさん恨み事があるようやけど」

猫は目を細めて私を見る。

「恨みや呪いちゅうのは、厄やっかい介なもんやで。それ判ってんのんか」

「は？」

「人を呪わば穴二つ、て昔から言うやろ。恨ん

だ方にもそれなりの報いがあるっちゅうこつちや。呪い返しなんぞかけられんでも、ある程度の覚悟が必要や。それが出来てんのんか」

ぼつてりした顔で、おなかを揺らしながらその猫は言う。

そういうものなのか。でも。

「血イを見るかも、しれへんで」

「でも…あの男に恨みを…晴らせるなら…」

そうだ。あの男に呪いを。

呪いを。

「呪ってやる、恨んでやる、呪ってやる…」



「ああもうわかったがな。全くその形相だけで

三人くらいは呪い殺せそうやけどな」

「何ですって？」

「いや何でも」

猫は紙のついた棒を私の前にかざし、

「ほんなら、呪うんやな」

と言った。

「の、呪ってくれるの」

「姉ちゃんが願うんなら、しやあないわ。ちいとお賽銭は奮発してもらわなあかんけどな」

「いつ、幾らなの。いいい幾らでも出すわよ一万円でも五万円でもさんじゅうまんでも」

「ちよつ、ちよい待ちいや」

猫は慌てて私の言葉を遮り、耳元で囁いた。

「正直な話、わしとこの神通力は限られてんねん。費用対効果つちゆうところからいけば、まあ五千円くらいがええと思うで」

「あらそう」

「あんまり自分とこの悪口も言えへんけどな、うちはまだまだ格下やねん。まあ、そのかわり良心的な価格設定やさかいな」

「ふうん」

ほんとに効くのだろうか。しかしまあ、駄目もとで試してみる価値はありそうだ。

「ほなら後悔せえへんな」

「も、もちろん」

「さよか…ほれ、正座して」

私は言われるまま、お宮を背にして正座した。

「心をな、穏やかにするんや」

「はい…」

すう、と私は深呼吸した。

「ほないくで…」

猫の、大きく息を吸う音が聞こえる。

そして。

「ウラミマア~~~~、スツ」

泣くような歌うような声が聞こえた。

「ウラミマア~~~~、スツ」

この台詞。

「イヤツダト、オモワレナクテ、イイモノオ  
〜」

何処かで聞いた気が。

なんだこれ。

「ドアニ、ツメデ、カイテ、ユクウワア〜」

なんだか、馬鹿にされてるような気がしてきた。

「ウラミマア~~~~、スツ」

「ちよ、ちよつと」

「はいそのままっ」

猫はぎらりと目を光らせた。

私はちぢこまった。

「あなたと彼の、思い出の場所っ」

「え」

「明日、そこに行って、確かめなはれ」

「は、はい…」

「これを持ってな」

猫は、私の掌てのひらに、何かを乗せた。

「願いは叶かなえた！ さらばじゃ~~~~」

ぐるぐるとつむじ風が舞った。

「うわっぷ」

ホコリが。枯れ葉が。私を包む。

風がおさまると、猫はもうどこにも、いなかった。

私の掌には。

小さな黒い招き猫が、置かれていた。

\* \* \* \* \*

思い出の場所。

あの男に、初めて声をかけられた、テラスのあるカフェ。

私はそのテラス席に座っていた。

一応サングラスと帽子で変装をした。あの猫の呪いを確かめるために、私はここにやって来たのだ。

黒い招き猫を握りしめて。

「オーライ、オーライ」

「もうちよつと右」

道端で、何か作業をしているようだ。トラックが駐まって、数人の男が作業をしている。

「ミラクルジャンボ宝くじ、本日発売ちゅ」

カフェの隣に出来た悪趣味な宝くじ屋が、奇妙な歌を流している。全くもって不愉快だ。

通行人は、そんなもの気にしないといった顔で、通り過ぎて行く。その表情すら不愉快だ。

しかし本当に、呪いは効くのだろうか。あの高慢な男に。

それに今あの男がここに現れたら、私はきっと平静でいられない。どうしよう。

どきどきと鼓動が高鳴る。トマトジュースの氷が溶けて、からからんと音を立てる。

私ったら、一体何をやってるんだろう。

「あ」

やって来た。あの男だ。

しかも。

女を、連れている。

大柄な、筋骨隆々とした女だ。  
か弱い女が好きなんじゃなかったのか。

はずだった。

「ねえダーリン」  
「何だい」

もともと運動オンチな私が投げた招き猫は、  
すぐ足下の地面に激突した。

何がダーリンだ。

「ワンワン！」

見せつけやがって。

私は。

散歩していた犬が吃驚して吠える。

私は。

ばさばさばさばさ

くっそう。

もう耐えられない。

歩道の脇をうろろうろしていたハトが飛び立つ。

「このっ！」

「何なにどうしたの？」

私は男めがけて、あの招き猫を、投げつけた。

通行人がハトを見遣る。

「ねえダーリン」

「何だい」

ぼっん

「危ない！」

叫び声が聞こえた。

「えっ」

私は見た。

巨大なものが。

白いものが。

振り子のように振られて、飛んでくる。  
あの男めがけて。

「うわ」

とっさに女は飛び退った。

しかし男は。

うそ。

ぶうん

「うわあああああ」

私は、目を覆った。

ばふっ

「のわっ！」

どしん

ずるずるずるずる

「ダーリン！」

私は、恐る恐る目を開けた。

あの男が。

街路樹の根元で、仰向けにのびている。  
逞しい女が、それを抱きかかえている。

「だっ、大丈夫ですか」

作業員らしき男が駆け寄る。

その脇には、あの男に激突した、

招き猫が。

巨大なバルーンのような、招き猫が。

ふわり、ふわりと、風に揺れていた。

「お怪我はないですか」

「な、何よあんた」

「バルーン吊り下げた片方のフックが外れちゃったよう、どうもすみません」

「すみませんじゃないわよ！ あたしのダーリンに何てことしてくれんのだよ」

いや、あんたはさっさと逃げただろその男置いて。

と心の中でツッコんだが、もちろん声には出せない。

「ダーリンしっかりして」

「…うーん」

はらり。

男の内ポケットから、何かが落ちた。

「…あれ？」

女はそれを拾い上げる。

「ちよっ、これ、あたしの預金通帳じゃない！」

そして女は、勢いよく立ち上がった。

「あでっ」

男は放り出されて、したたかに頭を打った。

「ちよっとこれ、どういうことよ」

「えっ」

「ちよっとあんた！ いつのまにあたしの」

女は男の首根っこを掴まえ、激しく揺さぶる。

「ぐぐ、ぐ、ぐるじい」

「あつ、印鑑まで！ このコソ泥男！ 一生大事にするって言ったじゃないの！」

「ちよ、は、はなせばわかる」

「だまらっしゃい！」

ぐうと男は捻り上げられ、

「くらえっ！」

その腹に女のコブシが、めり込んだ。







「お、お客さん！」

「うううううううううう」

テーブルの上にあったもの。

全部私に、降って来た。

シュガーポット。

お冷やのグラス。

そして。

「うええええええええ」

トマトジュース。

私は、返り血を浴びたみたいにな、真っ赤に染まった。

ひどい。冷たい痛い寒い。

「あいたたた」

私はずりずりと身体を起こした。

手に何かが触れた。

それは。

「血イ見るかも、しれへんで」

あの黒い、招き猫だった。

おしまい

短気には、にやんこ顔

「くっそう、まったくムカつくぜ」

俺は怒っていた。

何に怒っていたかといえば。

朝家を出る時に犬に吠えられた。職場で飲んだ茶がまずかった。昼飯のラーメンのメンマが固かった。書類に押し込んだハンコがずれちまった。同僚の北海道土産は俺の嫌いな羊羹ようかんだった。エレベーターに乗ろうとしたらブザーが鳴った。そして地下鉄が二分遅れやがった。

何だっぺんだ一体。おかげで今日はずっと機嫌が悪く、あちこち怒鳴り散らしてしまった。

いや、今日に限ったことじゃないんだ。俺は

短気で怒りっぽい。会社や家で誰かがやらかけたことが、とにかく気に食わない。そして自分でやらかした失敗にも我慢がならないんだ。

「ていつ」

潰れた空き缶を蹴っ飛ばそうとしたら、

がきん。

「いってええええええええ」

それは空き缶じゃなく、錆びて折れた鉄柱の根元だった。

「何だっぺんだちきしょう」

俺は怒鳴った。そして鞆を放り投げた。

その鞆が道端に転がり、それを避けようとした車が。

ぶつぶーー

クラクションを鳴らしやがった。

「うるせえこのばつきやろう」

痛え五月蠅<sup>うるせ</sup>え、全く気に食わねえ。何もかも。

普通の人間なら酒でもかっくらって騒ぐところなんだろうが、俺は酒が一滴も飲めない。

だから余計にストレスが溜まる。

くっそうくっそう。俺は頭が破裂しそうだ。

この鬱憤<sup>うっぶん</sup>、どうしてくれよう。

がららん

大きな鈴のようなものを鳴らす音が聞こえた。

ふとその音の方を見ると、赤い鳥居の前に、小さな男の子が立っている。しばらく俯いてい

たが、すぐに走って何処かへ行ってしまった。

こんな処に神社なんて、あつただろうか。毎日通っているのに、さっぱり気が付かなかった。

俺は鞆を拾って、何故か吸い寄せられるように、その神社に向かって、歩いて行ったのだ。

\* \* \* \* \*

「何だこりや」

うさんくさい真っ赤な鳥居が夕日に映えている。

こんなに目立つものなんだから、すぐに気付いても良さそうなんだが。お宮は銅葺どうぶきで、不細工な犬だか猫だか判らない動物の像が、その両脇さに置いてある。いっちよまえに賽銭箱さいせんばこまでしつらえてやがる。

気に入らねえ。俺は足を振り上げて、賽銭箱を。

「蹴けったらあかんで」

びくんとして足を止めた。

何だ誰が俺に意見しやがる。ぎろりと睨にらんでやるつもりで辺りを見回したが、誰もいない。空耳か。

「そない怖い顔せんでもええやろ。ほれリラックスしてお祈りしてえな」

いや足元だ。しかし子供の声じゃない。声の主は。

「お賽銭、奮発ふんぱつしたってや」

「うわっ！」

さすがの俺も吃驚びっくりして飛び退いた。

でっかい腹をした虎猫が、直立して俺に喋り掛けている。手には白い紙のついた、幣束へいそくっていったか、あれを杖のようにして持っている。

「な、なんで猫が」

「喋ったかてええやないかい。猫も日々進化してるんやで。いまだにウイングチップとか履はいとるおっさんとは違うんや」

「う、うるせえっ」

俺はムカついた。俺の靴のことなんかどうでもいいじゃねえか。しかし猫はそんなことは意に介せず、しやらりと幣束を振って言う。

「ほらほら、そうやって怒るのがあかんねん。

あんた、その性格でいろいろ損してるみたいやけど」

「うっ」

「短気は損気、て昔から言うやろ。も少しのーんびりしたらええねん。周りはそんなパツパと動けへんねんで」

「わ、判ったような口利くんじゃねえよ。なんで俺が猫に説教されなきやなんねえんだよ」

俺は思いきり怖い顔を作って、猫に近付いた。しかし猫は全く動じない。

「まずはその顔やな」

ぺし、と猫は俺の鼻面を幣束で叩いた。

「あたっ」

「仕事でうまくいかへんのも、家族とうまくいかへんのも、短気な性格も、この顔のせいや。

これなんとかしたら、案外他のことも、うまくいくかもしれへんわ」

「なんだとう？ この顔は生まれつきなんだよ。整形でもしてくれんのかよおい」

「せやから凄んだらいかんちゅうねん。そんな顔作って何かええことあったんかいな」

そう問われて、俺は気付いた。会社で新人がすぐ辞めるのも。取引先での俺の評判が最近良



くないのも。妻と娘が実家に帰ってしまったのも。

「あんたみたい怖い人と一緒に居たら、こっちがおかしくなんのよ」

妻はそう言っていた。俺の顔のせいなのか。

「な、治るのか、この顔が」

俺は何時の間にか、猫にそう、真面目に訊きいていたのだ。

「せやな。心が次第ってとこやなあ。どや、治したいんかいな」

「あ、ああ。治るもんならな」

「さよか…ほんなら」

にゆう、と俺の鼻先に、ピンクの肉球が差し出された。

「千二百三十九円」

「は？」

「お賽銭やがなお賽銭。神さんはボランテイヤとちやうねんで。ギブ・アンド・テイクや。しかもうちは良心的かつリーズナブルな価格設定やさかいな。そこの神さんには負けへんで」

その基準がよく判らないんだが。それになんてそんなに半端な金額なんだ。

しかしともかく、俺は財布からごそごそと金を取り出した。今日に限って小銭がひとつもない。

「あ、釣り銭は出えへんさかいな」

ちやつかりしてやがる。俺は二千円を猫の手に乗せた。猫はそれをさっさと後ろに隠し、

「ほれ、正座しなはれ」

と俺に命じた。

俺は一瞬イラッと来たが、我慢我慢。ここは辛抱したほうがいいだろう。お宮の前にちんまりと正座した俺に、猫は幣束を掲げた。

そして。

「タンキハツ、ソンキー、ビックリドン◎ー」

叫んだ。なんだこれ。

「ズットアナタ、ダマツテイルワー、ワタシノコト、オコツテイルノー」

そして歌い出した。

「コレジャキットー、ミチノトツチュウーデー、ガスケツダワ、アキレタヒートネー」

大昔に聞いたことがあるような気が。

「おいこらっ」

「はいそのままっ」

怒鳴ろうとした俺を猫は制して、何か差し出した。

「これをな、鞆につけなはれ」

「…なっ」

それは携帯用のストラップだ。ピンクのキイちゃん。しかもウインクしてやがる。

「こ、こここんなもんつけられっかよおお」

「早うしなはれや」

ぎらりと猫の目が光る。怖い。俺はそそくさと、鞆の持ち手にそれを取り付けた。

「よろしい」

にやりと猫は笑い、幣束をぶんと上に振り上げた。

「マターリシテ、イラッシャーイ」

幣束はぐんぐんでつかなくなって、ぶっとくなくて、まるで電柱みたいなサイズになった。そして。

「うりやっ」

幣束が、俺に向かって、振り下ろされる。

物凄いスピードで。

ちよちよちよつと待て。

うそだろ。

俺は。

「う、うわあああああああああああああああ」

\* \* \* \* \*

気が付くと、俺は部屋で寝ていた。

ちちち、と雀の鳴き声をする。もう朝か。

まったく、なんて夢だ。猫にぶっ叩かれるなんてな。俺はのろのろと起き上がり、顔を洗おうと洗面所に向かった。

冷たい水を頭からぶっかけて目を覚まし、髭を剃ろうとシェーバーを取り出して。

「なあああっ！」

俺は仰天した。

俺の顔は。眉毛がぶつとくて眉間に皺しわが寄ってる、強面の俺の顔には。

猫みたいな髭ひげが、三本ずつ。ほっぺたの両側にくっつきりと、書いてあった。

そして、鼻は真っ赤に腫はれて、ぶっくらしている。

鼻の穴のところだけ、ほくろみたいに黒い点が。

まるで鼻くそ付けてるみたいだ。なんて顔だ。なんて。

「ぶぶっ」

俺は、吹いてしまった。自分の顔に。

いいやいかんいかん。どうなってんだ一体。このまま会社になんて行けるわけない。

必死になってほっぺたをこすったが、黒い髭はとれそうにない。鼻の腫れも黒い点も、どうしようもない。

「まったく、どうなってんだ！」

…あ。

あの猫か。

あの猫が、俺に何かしたのか。

俺は慌てて、鞆を探した。玄関に放り投げてあった、俺の鞆には。

ピンクのキ◎イチちゃんが、しっかり付いていた。

「…ま、まさか…」

俺はいつたい、どうすりゃいいんだ。

\* \* \* \* \*

「おはようございます」

「おう」

女子社員の挨拶を、俺は不機嫌そうに受け流

した。

「ミカミさん、風邪かしらね」

「あんな大きなマスクしてるの、初めて見たけど」

「なあに、あのキ◎イチちゃん！ ちよつとあんな趣味あったつけミカミさん」

「やだーかわいいー」

すぐ背後では口差のない奴らの噂が始まっている。しかしそんなもんに関わり合ってはいられない。こんな情けない顔を見られたら、俺は俺の威厳は。

「ミカミさん、きのうの書類、出来ましたけど」

部下のタシロが書類を持って来る。こいつは

漢字が苦手で、しかも字が汚い。また何カ所も間違えてやがる。

タシロは怒られるのを承知してか、びくびくしながら俺を見てやがる。怒られるのが判つて  
るなら、最初からちゃんとしろってんだ。

俺は書類をボードごと机に叩き付け、

「こらタシロ、おまえ何度言ったら」

「はっ、はひ」

怒鳴り声をあげようとした瞬間。

はらり、とマスクの紐がとれた。

「おわっ」

俺は必死でマスクを押さえた。

「あ、あの…だいじょうぶ、ですか」

タシロは俺の顔を覗き込んで来やがる。

「大丈夫だだいじょうぶだ、なんでもない。それより、漢字の間違い三箇所！ 自分で見つけて直して来い」

「は、はい、すぐに」

書類を持って、タシロは退散した。どうも調子が狂う。顔に気を取られているぶん、いつもみたいに怒鳴っている暇が無い。

そうこうしているうちに、昼飯の時間だ。マスクの下を持ち上げて、出前のラーメンをちゅるちゅると啜る。食いずらいたらありやしない。

「ミカミくん、どうしたね。そんなに風邪がひどいのかい」

社長が心配そうに寄って来た。

「いえいえいえいえ、なんでもありません。

ごほんごほん」

「そうかい、あんまり無理しないでくれよ。他の社員にも伝染ると困るしな」

「はい、すみません」

怪訝そうな顔をして、社長は行ってしまった。俺はまたラーメンを不自然な体勢で啜る。遠くの方で、俺を見てくすくす笑っている女子社員がいる。

ムカつくが、この状態では怒鳴り散らす訳にもいかない。俺はようやくやくラーメンを食い終え、

ていねいにマスクをし直した。

途端に、物凄い睡魔が俺を襲った。いつも昼休みはぶらぶら散歩して過ごすのだが、これでは駄目だ。

俺はよろよろ井を片付け、机の上に突っ伏した。一分も経たないうちに、俺は泥のような眠りの中に、落ちていった。

\* \* \* \* \*

「…さん、ミカミさん、起きてください」

声が聞こえる。

「会長がみえてますよ。ミカミさんってば」

「ぬあ…か、会長？」









た。

「ミカミくん、最近君の業績は素晴らしいよ。来月には課長に昇進だな」

そう社長が言ったのには耳を疑った。このへなちよこな顔は、俺に幸運をもたらしてくれたのだ。

口笛を吹きながら家へ帰る。明日は妻の実家に行つて、また一緒に暮らそうと頼むことにした。

こんな顔だから、最初は笑われるに決まっているが。

そうだ、あの神社にお礼参りに行こう。

最初はとんでもないことをしてくれたと怒つたものだが、今となつては猫神さまさまだ。

「…あれ？」

ない。

あの神社。確かに此処にあつたはずなのに。竹林がもつさりとしているだけだ。

あれは、夢だったのか。まさか。

俺が呆然としていると。

ばさばさばさつ

「うわっぶ」

風で大きな紙が飛んで来て、俺の顔に貼り付いた。

引き剥がしてみると。

「猫稻荷神社移転のお知らせ お客様大感謝祭  
計画中 詳細は未定 毎度おおきに」

と、下手くそな筆文字で書いてある。  
なんだこりゃ。しかも大感謝祭って。つくづ  
く生臭い神社だな。

「へ、へへへっ」

俺は片頬で笑った。

竹林が風に揺れ、ざざあ、と楽しそうな音を  
立てた。

おしまい

初  
詣  
（再）

「やった！ 大吉！」

クミが御神籤おみくじを開いて、そう叫んだ。  
あたしは。

「ねえねえマリちゃん何？」

「えっ、ちよっと見ないでよ」

「いいじゃーんほらー。えいっ」

「やっ、やめてーったら」

クミがあたしの御神籤をふんだくって、開けた。

「わははは、やだーうっそー、なにこれ「小凶」っ  
て！」

ああ、まただ。

どうしてあたしは、いつつもこういうのばかりなんだろう。

この世に生を受けてはや十八年。初詣で御神籤を引くこと延べ五回。

うち、一番良かったのは「末吉」。

あとは「凶」「凶」「大凶」だった。

そして今回は。

「小、小ってなにー！ わはははは」

涙流して笑ってるよ、クミのやつ。

あたしは怒って、御神籤をひったくった。

「そんなに笑うことないでしょー、人の御神籤  
でー」

「だって、ひ、しょ、小って！ どんだけ中途半端なのー！ わははは」

そんなにおかしいのか。確かに中途半端だけどさ。別に笑いを取ろうと思って引いたわけじゃないもん。

「はあ、なんか受験駄目な気がしてきたよ…」

くらーい気持ちになってあたしがつぶやくと、

「いやっ、あんた、いけるよ絶対！ だってこんなん狙って引けるもんじゃないもん！ 何か持ってるなあんたは。うん」

涙を拭きながらクミはあたしの肩を叩く。ほんまかいな。

「持ってもさー。いいほうのものって限らないじゃん」

「そうだけどさ。いやいや大丈夫！ あんたは今あたしを幸せにした！ だから間違いない！ あんたは何か持ってるって。うん。ぷぷっ」

って、言ってるそばから吹いてちや、なんだか信用ならない。

クミと別れて、あたしはとぼとぼと歩いて、家に帰ることにした。

\* \* \* \* \*

「今は随分簡単になったじゃない、受験。あたしのときなんかね…」

ママはそう言って、自分がどんだけ大変だったかをとうとうと話すんだ。

でもさー、そりゃ時代によって違うでしょ。あたしだって別にこんな時代に生まれたくなかったもん。

大学卒業したって仕事が見つかるかわかんないし。だいいち、大学でなに勉強しようとか考えてないし。ただいけそうな大学のいけそうな学部に入ろうって、それだけだし。

そんなんじや駄目だって。パパは言うけどさ。いまいちわかんない。あたしみたいなのが、社会の役に立つんだらうか。

彼氏もないお金もナイ希望もナイ。あるのは不安と受験対策の参考書だけ。あたしの十代後半、こんなんで過ぎていくのか。

「はあ」

暗い夜空に、もわつと息を吐き出した。

街灯のあかりが、ぶぶぶぶって瞬またたいて、息をフラッシュみたいにに、照らした。

「うう寒っ」

マフラーを顔に巻き付けて、あたしは歩いた。それにしても暗いな。神社に行くとき、こんなに暗かったっけか、この道。なんて思って歩いてると、

「…あれ？」

道のむこうに、焼き鳥屋の提灯みたいな、赤いあかりが見えてきた。

あたし、道間違ってないよね？ でも来る時



あんなのなかったよね？

いきなり不安になってきよろきよろしたけど、  
ほぼ一本道だし、間違えようがない。どうも気  
になるそのあかりを見ながら、あたしはとぼと  
ぼ歩いた。

「なんだこれ」

近くまで来て、驚いた。

赤い提灯は、なんと、猫の形だ。

真っ赤な招き猫が、そのまんま提灯になつて  
る。

提灯は真っ赤な鳥居の脇にひとつずつあって、  
その奥にはこれまた真っ赤なお宮がある。脇に  
は狛犬？みたいなのもちやんといるし、ちいさ  
な賽銭箱さいせんばこも置いてある。

こんなところに神社あったんだ。せつかく来た

んだし、いちお願いしておくか。

あたしは財布から小銭をてきとうに掴んで、  
賽銭箱に放り投げた。

じやらじやらじやら

ばん、ばん

「志望校に、受かりますように。そしてハッ  
ピーな大学生活が、おくれますように」

「ハッピーながくせいせいかつ、かいな」

「そうそう」

「ハッピーってどんなんや」

「えー、よくわかんないけど」

「わからんのかいな」

「うん」

って、誰!?

「わからんでお願いする人も珍しいな」

どこ、どこ?

「ほれ、ここや」

あたしは足元を見た。

にゆうつと、あたしの顔の前に突き出されたのは。

ピンクの肉球。

「もちっと奮発してえな」

「どひゃっ!」

あたしはのけぞった。そして自分のリアクションに呆れた。なんだこれ。

「なに驚いてんねん。君の昭和まるだしなリアクションのほうがよくぽどびっくりやで」

そこに突っ込むのか。やるな。

いやそうじゃない。あたしの足元にいたのは、猫だ。茶トラのでっぷりした猫。

その猫が、二本足で立って、ひらひら紙の付いた棒を持って、しゃべってる。

「ねっ、猫がしゃべった」

「いかんのかいな。アイパッドでも猫用ゲームが発売されてんねんで。そら猫もハイテク化す

るがな」

「いやそうじゃないでしょ」

「まあええわ。それで、君、そのハッピーながくせいせいかつ、それを叶<sup>かな</sup>えたいちゅうわけやな」

「うん、まあ、そうね」

なんか、この猫とふつうに会話してる自分がキモいんだけど。

でもかまわずに猫はしやべってくる。

「まあそうねって、熱意がないなあ、熱意が」

「だってそんなもん、もともとないもん」

「そんないかげんなお願いは、かなえられへんな」

「えーそんなー」

だめって言われると、なんか惜しい気がしてくるのがニンジョウつてもんだ。あたしは拝み倒した。

「ねえっ、お願い！ あたし、今までいつかいもまともにお願いが叶ったことないのよ」

「さよか」

「さよさよ」

「なんやそれ」

「もう何でもいいの。とにかく、かなえてちょうだい！ おねがいっ」

ばん、ばん。

「こっ、こらちよい待ちいや。わしは神さんやあれへんがな」

「あれ、そうなの」

「せや。わしはイナリガミさんの眷属や。ケンゾク。わかるか？」

「あーあれ？ ボディーガードみたいな」

「微妙に違うな…まあええわ。せやからな、わしにお願いしてもあかんで。イナリガミさんにお願いせんと」

「あー、これおいなりさんなんだ。ねえねえ、あんたやっぱりあぶらげ好きなの？」

「そらそれなりに…ってちやうわい！ 正一位の神さんになんちゆうことを…」

「そんなん知らないもん。お願い叶えてくれればなんだっていいんだもうん」

「罰当たりな子やなく。じゃあ、ほれ」

猫は、また肉球をにゅつと、あたしに突き出した。

「なに、握手？」

「そうそう、おくてくて、つくないで、つてちやうわ！ お金やオカネ。ギブミー・マネーやがな」

「えー、そうなの」

「そらそうや。お願い叶えんのもな、いろいろ必要経費があんねんで、電気代に電車賃に文房具に」

「なんか嘘くさいな…」

「かあつ！ もうええわつ。信じない子は、カミサマ、シリマセーン」

「わあ、嘘うそうそ！ 信じてますよう」

「ほんまに」

「ほんまにほんま」

「さよか…ほんなら、カナエテツ、アゲマシヨ」  
「わーい」

あたしはバンザイして喜んだ。って、なんか妙な絵だねこれ。神社でバンザイする女子高生と猫って。

「ふむ、君は運がええで。ただいま、猫稻荷神社大感謝祭、開催中や」

「えっ、なにそれ」

「まあ、細かいことはええやろ。ようするに、君は運がええっちゅうこっちゃー」

「わー、やったあー」

「ほんなら、ほれ、千五百円」

猫は肉球を開いて、じつとあたしを見る。あたしは財布をぐそぐそ捜して、千円札と五百円玉を取り出した。

「ああ、これ、来週CD買うはずだったのに」

「そんななんいつでも買えるがな。ほれほれ」

「しようがないなあ…はい」

「へへへ、まいどおおきに〜」

後ろのほうにお金をごそごそしまうと、猫はひらひらのついた棒を高く掲げて、叫んだ。

「では、カナエテ、アゲマツショー」

「やったー」

「ってほら、正座や正座」

「えっ、正座なの」

「あたりまえや。神さんを何だと思てんねん」

「足いたいよう」

「ちつとの間や。辛抱しなはれや」

「はあい」

「ほな、いっくでー」

猫はぶんぶん棒を振り回して、正座したあたしの周りで踊り始めた。

「ハッピー、ツテ、エイゴダヨー、ダイガク、ツテ、イモト、チガウヨー」

妙な呪文だな。って、こういうの呪文っていうんだっけ。

「ラキラキ、オイナリ、ダイ、カンシャサーイ」

大丈夫かなほんとに。あたしのせんごひやくえん。

「はい質問ですっ」

と、猫があたしに言った。

「はっ、はい」

「今日ひいた御神籤、出たのは何っ」

「えっ、えつと、あれ、凶」

「凶？」

「ああちがった、あのね、小がつくの。小凶」

「小凶！」

猫は飛び上がった。

「そらすごいわっ！ 君ええもん持ってるで！」

「えっ、そうなの」

「そう、ネコ、ウソツカナサーイ」

いかがわしい。

「ほな、いっしょに唱えるんや。ええか」

「あ、うん」

「こまったときには、にやんにやんにやんにやん！」

「にやんにやんにやん！」

「イイカゲ〜ン、イイカゲ〜ン」

「イイカゲ〜ン」

「ウラミマア〜、スツ」

「スツ」

「マターリシテ、イラツシヤ〜イ」

「イラツシヤ〜イっ」

どっかで聴いたような。

「願いは叶<sup>かな</sup>えた！ さらばじゃ〜〜」

「えっ、ちよっとっ」

びゅううううううううう

強い風が吹いてきて、あたしの周りの落ち葉を巻き上げた。

「うわっぶ」

そうしてその風がおさまった時。

猫のすがたは、どこにもなかった。

\* \* \* \* \*

そして受験当日。

「やばい、遅刻する」

あたしは思いつきり寝坊した。

前の日夜遅くまでだらだら勉強、というか、だらだらネットで遊んでたのがいけなかった。あたしは走った。あのバスに乗らなきゃ。

「ああっ」

ぷしゅー

バス、バス行っちゃった。どうしよう。

そうだ、タクシー拾おう。

「タクシー！ タクシーってばっ」

手を思い切り挙げて、道ゆくタクシーの数は少ない。

ああもう、早く停まってよう。

と、その時。

タクシーじゃないクルマが一台。するすると寄って来た。

「乗ってく？」

声を掛けて来たのは、軽薄そうな若い男の人だ。

えっ、ひよっとしてナンパ？

「あの、あたし、◎◎大学まで行きたいんですけど」



「ああ、いいよ。乗っけてあげるよ」

「ほんとですか！」

「うん、ちょうど通り道だしね。ああ、そうでもないか。まあいいや」

「適当な人だなあ。」

兎も角、こうなったら一か八かだ。あたしは後ろの席に乗り込んだ。

「受験生？」

「あ、はい、そうです」

「そうなんだ。まあ気楽にやんなよ。焦ってもいいことないよ」

その会社員ぽい男の人は軽い感じでそう言う。なるほどねえ。確かにそうよねえ。すると、ぴりりりと、ダッシュボードの

ホルダーに置かれたケータイが鳴った。ヘッドセットを付けてるっぽい男の人は、ぽち、とボタンを押して話し始める。

「はいはい、マキシマくんですよ」

「なんだこの軽さ。」

「え？ ええ。今向かってます。はい。いいじゃないですか少しくらい遅れたって。大丈夫大丈夫。あ、また電話しまーす、はいはい」

と、さっさと電話を切ってしまった。あたしは心配になって、

「あのう…ほんとに、いいんですか？」

と聞いてみた。するとその人、

「いいのいいの。せこせこしたってき、どうせ打ち合わせなんて、最初の十分はどうでもいいことばっか話してんだよ」

そういうものなのか。

「ずいぶん、軽い感じなんですねえ」

「えっ、僕？ はは、そうかなあ。いつもこんな感じだからねえ」

「そうなんですか、小さい頃から？」

「いや、小さい頃は暗い子供だったよ。大人になっても、ずっと暗いまんまだったねえ」

「へえ、意外です」

「そうでしょ。ある日さ、猫のいる神社に行っ  
てお願いしたらさ」

「えっ」

「なんか、僕、変わっちゃったんだよね」

うそっ。

あの神社のことかな。

「そんでき、あのさ、信じられないかもしれな  
いけどさ」

「はい」

「なんか今日ぴーんときてさ。今日はこっちの  
道やで！ って、あの猫が言ったような気がす  
んだよね」

「ええええ」

「ダイカンシャサイなんやで。とか何とか。  
まあもうどうでもいいけどさ。あはは」

あははって。

ほんとに軽い人だな。

それにしても、あの猫やるじゃん。

これもお願いのうちに入るのかな、やっぱり。

「はい、着いたよ」

「あつ、ありがとうございます」

「いいっていいって。それじゃあね」

ぶおおおおおお

男の人は、さっさといなくなってしまった。

あたしは。

「やばい、遅刻遅刻っ」

受験会場に向かって、ダッシュした。

\* \* \* \* \*

大きな教室は、もう受験生たちで一杯だった。

あたしは自分の番号を探して席につき、ぜいぜいと息を整えた。

こんな体調で、できるかなあ。この大学、偏差値ぎりぎりなんだよなあ。

「はい、では問題配ります」

後ろから、学生さんが用紙を配りながら歩いてくる。ああ、どうしよう。やっぱり昨日も少し勉強しとくんだった。

困った困った。

こまった。

「こまったときには、にやんにやんにやん」

「そう、にやんにや…え？」

あたしはびっくりして、顔を起こした。すると。

問題用紙を配っていた学生さんが、あたしとおんなじように、びっくりした顔で、こつちを見ていた。

「…え？」

「いえ、なんでもないです」

学生さんは、そそくさと用紙を配りながら行つてしまった。なんだ一体。

「はい始めっ」

ようし、これはわかる、おとといやったとこ

だ…うん。そんでこれも…あれ、これでいいんだっけな。まあとりあえずね。そいで次…。

ああ、やっぱり出た。この問題。でも答ええ忘れた。ああああ、どうしようどうしよう。困った。

こまった。

「こまったときには、にやんにやんにやん」

…あ。

あれか。

ええい、もう時間がない。書いちゃえ。「2・

2・2」。

ほんで次は…。

…。

…。

「はい終わりー」

あああ、なんとか全部できた。よかった。  
あたしはぐったりして、机に突っ伏した。

\* \* \* \* \*

「あの」

「えっ」

お昼の休憩時間、受験会場の外でお昼を食べ  
ていたあたしは、いきなり声をかけられた。

あの人だ。問題配ってた学生さんだ。

「はい、なんででしょう」

「君さ、もしかして、猫の神社に行った？」

「え？」

「は、まさかね、そんなわけないよね」

「行きましたけど」

「そうだよねそんなこと…えっ、ええええええ  
え」

なに驚いてんの。って、あたしがいちばん驚  
いてるんだけど。

「そ、そうなの」

「はい、初詣の時に」

「そうなんだ…じゃああの夢は」

「夢？」

「あ、あのね、信じられないかもしれないけど  
ね」

彼はあたしをじっと見て言う。あたしはドキ  
ツとした。

「でっぷりした茶トラの猫がさ、夢に出て来て言ったんだ。あの子の前でちゃんと言うんやで、困ったときには、にやんにやんにやん！ って」

「はあ」

「あの神社に猫と、君みたいな女の子が立ってるのが見えてさ」

「へえ」

「僕もさ、一年前の初詣で、行ったんだよ、あの神社に。そしたら受かってさあ」

「そうなんですか！」

やった。すごいじゃん猫。

「でもねえ、なんか気懸かりなんだよね」

「えっ、何がですか」

「いや、夢の中で猫がさ、ダイカンシヤサイな

んやで、って叫んでただけとさ」

「はあ」

「あれは何だったんだろ」

「ああ、そういえばそんなこと、言っていましたね」

「何が感謝なんだろうね」

「さあ」

「へんだよね」

「へんですね」

うふふふ、と、あたしたちは笑った。

「まあいいや。御利益ごりやくがあるかどうか判らないけど、とにかく頑張ごんぱんって」

「はい、ありがとうございます」

うわあ、なんかすっごいいい予感。

猫たのむよ猫。あたしに、ハッピーな、ハッピーな学生生活をつ！

\* \* \* \* \*

「うわ、また遅刻だ」

四月。あたしは念願かなって、あの大学に入学できた。

ほんと、あの猫の、いやあの神社のおかげかもしれない。

とはいっても、案外一年生ってのは忙しいんだ。朝早くから授業があるし、サークルとかもいろいろ誘われたし。

あたしはパンをかじりながら家を飛び出して、大学へと向かった。

いつものバスを降りると、大きなテラスのあ  
るカフェが見えた。ここはわりとおサレな学生  
がたむろするところなんだ。

あたしはたまに、ここで、受験のときに声を  
かけられたあの先輩を見かけることがある。

入学してからまだ一度もしやべったことない  
んだけど。なんか純粹そうで、よさげな人なん  
だよなあ。

走りながらテラスに目を向けると、あつ、い  
たいた。先輩。

何してんのかなあ。本とか読んでるのかなあ。  
声かけちやおうかな。いいよね別に声かける  
くらい。

あたしは、そろりそろりと階段をあがって、  
テラスにいる先輩へと近付いてった。

ああでもなあ、君誰だっけ？とか言われたら  
どうしよう。

ええいもういいんだそんなこと。

行っちゃたら行くのっ。

先輩の背中が近付く。ああもう心臓バクバクだ。

どうしよう。

かみさま。

ふと、先輩が振り向いた。

「…あ」

そのとき。

「恨んでやるうううううううううううう」

先輩の隣のテーブルにいた女の人が、思い切りおっきな声で叫んだ。

「うわあああっ！！」

先輩はびっくりして飛び上がって、あたしに抱きついた。

「えっ」

「あっ、あの」

あたしと先輩は顔を見合わせて。

そして、叫んだ女の人を見た。

女の方は、こちらをきよとした顔で見て。

「…何なの一体」

首を傾げながら、テラスを降りていった。そして。



くるっと振り向いて。

「…猫？」

訳の判らないことを呟いた。

「何だろうね、あの人」

「さあ」

「あつ、ごっつ、ごめん急に抱きついて」

「ああ、いえあの、ただ大丈夫です」

「あ、君さ、あの受験のときの」

「そう、そうです！」

なあんと、ここで話が弾んだのだ。

幸先良すぎるあたしの学生生活。

それもこれも。

あの神社のおかげ、かな。

\* \* \* \* \*

「ふんふんふん」

あたしは先輩とデートの約束をとりつけて、スキップしながらの帰り道だ。

「マリちゃん、やっぱあんたは何か持ってるわ」

あたしの得意げな報告メールに、クミからこんな返信が来た。

猫神社やるなあ。千五百円でこれは、お得じゃないの。

あ、でもこういう時って、お礼参りとかすんだよね。ちゃんとお礼しないと、あとで祟りと

かがあるかも。

まあ、あの猫の祟りじや、あんまし怖くないかもね。そんなことを考えながら、あたしの足は、自然とあの神社に向かっていた。

あつたあつた。招き猫の提灯。真っ赤な鳥居。そこに立つひとりの男。

…男お？

あの曲がった背中。どっかで見たような気が。

そおっと近付いて、あたしは叫んだ。

「…おじさん！」

ミカミのおじさんは、ママの弟だ。昔はすんごく怖い人だった。眉間に皺しわよせて、

ニコリともしなかった。

奥さんが何度も、ママのところに相談に来ていたから、離婚しちゃうかと思ってた。

それなのに、最近なぜか、とつてもお茶目な人になっちゃったみたい。

夫婦で遊びに来るなんて、全くなかった人なのに、かわいい赤ちゃんを連れて、毎週のようにニコニコしながらやって来る。

「えっ、何だ何だ、マリちゃんじゃないか」

「こ、こんなとこで何してんですか」

「マリちゃんこそ」

「いや、それはあの、ちよっと」

びっくりだ。どうしておじさんがこんなとこに。

「お、おじさんはどうして」

「え、いやなに、お参りだよお参り」

「ここに？」

「そうさ」

にひひ、と、おじさんは笑った。

ほっぺにうつすらと、猫のひげみたいなのアザがある。

「どうして」

「いや、それは、なんとというか、俺の立ち直りのきっかけ、というかさ」

「へえ」

「行き詰まってるときに、ここに来たんだよな。」

そうしたら道が開けてさ」

「へええ」

「もつとも、昔はここじゃなかったんだ。もつ

と北のほうで、ずいぶんへんぴな場所にあったんだよ」

「辺鄙へんぴでわるうござんしたねえ」

「うわっ！」

足元に、いつのまにか、いた。

あの猫が。

「なんだ、いるならいると」

「さっきからおるわい。君らが気付かんかっただけやないかい」

「ねえおじさん、おじさん時もこの猫いたの」

「ああ、そうだ、あん時と変わらないメタボ腹だな」

「ぼよよくん、って違うやろ！ 失礼なやつちやな」

いちいちノリツツコミする猫も珍しい。

「さて娘よ、君、ハッピーなガクセイセイカツ、送れてんのんか」

「あ、はい、まあ」

「まあて何やねん。イエスかノーか」

「い、イエス」

「さよかく。ほな、奮発してえな」

にゆう、と猫が肉球を差し出す。おじさんに向かって。

「えつ、今日は大感謝祭って、夢途中で」

おじさんがそんな事を言う。

「せや。ダイカンシヤサイやで。ダイカンシヤサイちゆうのはな」

「はあ」

「君らが、わしらに、カンシヤするんや！」

「はあ？」

「それのおかげで、ほれ、あんたの姪っ子は、えくえ感じにエンジョイしてるやないかい、ガクセイセイカツを！」

「はあ……」

「ちゆうことや。ほれほれ、奮発しなはれや」

おじさんは渋々、財布から千円札を取り出した。

「ちやうちやう、ヒデヨくんやなしに、イチヨウちゃんや、その奥にあるやつ！」

「えつ、こ、これは俺のタバコ代……」

「タバコは健康に良くないねんで。さき、これを機会にキンエーン！や。どや」

「…はあ」

残念そうに、おじさんは一葉さんを肉球の上に置いた。

「へへへ、毎度」

「ねえねえ猫さん」

あたしは不安になって聞いた。

「つつてことは、よ、あたしもいつか、誰かのために、大感謝祭、やらなきやいけないの？」

「それはどうかな。ワタシニモ、ワカリマセー  
ン」

「そんなあああ」

「ではっ、さらばじゃ〜〜〜」

びゅううううううううう

風が舞って、猫が消えた。

後に残された、あたしとおじさんは。

「は、はは、ははは……」

引きつった顔で、笑った。

おしまい

## 猫神社

<http://p.booklog.jp/book/38961>

著者：佳(Kei)

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/gonchan55/profile>

縦書変換ツール：ChainLP

[公開ページはこちら](#)

参考文献：木庭七虹氏著『パプーで縦書き』

<http://p.booklog.jp/book/3868>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/38961>

海野ことり氏著のマンガ『猫神社 短気にはにゃんこ顔』

<http://p.booklog.jp/book/38688>

ブックログのパプー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/38961>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.